

2022年6月20日

## 令和4年度第1回 海岸工学委員会委員会議事録

開催日時：令和4年6月20日（月）14:00～17:00

開催場所：オンサイト（対面）およびWeb（Zoom）によるハイブリッド会議

出席者：

【オンサイト】岡安相談役，佐々木委員長，森副委員長，北野幹事長，荒木，内山，奥田，久保田，宮本，安田，高川，田島，坪野，西畑

【Web】磯部相談役，秋山，五十里，榎田（代理：二宮），太田（代理：梶川），織田，小野，柿沼，加藤茂，越村，下園，末岡，鈴木，西村，信岡，平野，宮武，山中，山本，横山，有川，李，加藤史訓，鳴原，瀬戸口，原田，福濱，山城，渡辺，渡部。

議事録：久保田

### ■ 佐々木委員長挨拶

- ・初めてのハイブリッド会議である。
- ・今後2年以内に査読のあり方，査読システムを変えていかないといけない。
- ・忌憚のない意見をお願いしたい。

### ■ 前回議事録の確認（WEB 公開済）

- ・前回委員会の議事録（WEB 公開済）を確認した。

### ■ 第68回海岸工学講演会報告（北野幹事長）

- ・第68回海岸工学講演会（オンライン開催）について報告された。
  - ▶ 参加者数 講演会：945名
    - 企画セッション1 波動と地盤の相互作用について考える：440名
    - 企画セッション2 海岸の将来ビジョンとその実現に向けた取り組み：460名

### ■ 2021年度活動評価（北野幹事長）

- ・活動評価Aをいただいた。
- ・Klaus Hasselmann 博士ノーベル物理学賞受賞記念行事参加者数や水理模型実験の理論と応用の出版物購入者数，海溝DVDや海岸波動CD-R版の販売数もカウントされている。

### ■ 第69回海岸工学講演会論文審査（下園副小委員長）

- ・登録論文数は248編（和文226編，英文22編），通常号からの投稿はなかった。
- ・過去5年の推移は256, 306, 321, 312, 362編
- ・昨年からは微減
- ・査読者：117名（幹事22名，海岸委9名，編集委32名，その他54名）
- ・査読数：10.6編/人
- ・企画セッションは実施しない。
- ・査読者リストの確認および審査手順およびスケジュールが確認された。
- ・査読平均点は3.76点であり，例年より平均点が上昇している。理由ははっきりわからない。
- ・査読結果は，18点以上が176編，17点が25編（内2または1がついた論文が4編），16点が25編（内2または1がついた論文が12編）であった。
- ・採択案について

- 幹事会で議論して A 案（16 点以上を採択）：226 編
- ・投稿数と採択数の推移，分野別投稿数・採択数・採択率が報告された。
  - 採択率：平均 90%
- ・セッション割り当ての検討が報告された。
- ・著者負担金と論文集 DVD 価格について説明された。
  - 上限 40,000 円（見込み 35,000 円）
  - 特別号論文掲載+発表：35,000 円／要旨論文+発表：20000 円
  - 論文集 DVD のみの頒布：3000 円程度
    - DVD パッケージの名称を改定する（名称：海岸工学講演会 2022）。
- ・論文投稿受付，第一段審査に関する報告がなされた。
  - 東北地方を震源とした地震発生（3/16）のため，締め切りを 1 日延長した。
  - 1 ページ目に著者情報が記載されている要旨が 11 編あった。
    - Extended abstract のフォーマット（1 枚目の著者情報）との混同
    - 次年度以降，HP の記載を分かりやすくする。
  - フォーマットに従っていないアブストラクトが 1 件あった（両ページに図とテキスト）。
    - そのまま査読に回し査読者の評価にゆだねた（結果的に不採択）。
  - システムから査読者登録通知メールが届かない事例が 5 件あった。
    - 締切前に判明した 2 件は，システム外より連絡して対応した。
    - 締切後に判明した 2 件は，査読者に急ぎの対応をお願いした。
    - 締切後に判明し，かつ査読者の対応が困難であった 1 件は，委員長，副委員長，幹事長，論文集編集小委員会（小委員長，副小委員長）で査読を実施した。
    - 原因については，現在のところ不明
- ・DVD パッケージ名称の変更についての説明がなされた。
- ・エラータの扱いについての説明がなされた。
  - 昨年度 2 件の申し出があった。
  - 現状，翌年の特集号に掲載される。
  - 2023 年からの新体制の土木学会論文集では，エラータの随時受付を検討する予定である。
- ・論文審査の途中経過の報告があった。
  - 査読判定において，B と C の違いが分かりにくいとの意見がでた（整理して教えて頂きたいとの要望があり）。
- ・査読システムが Editorial Manager に移行することを踏まえ，査読のあり方について考える必要あり。
  - 第 1 段査読の採択率が 9 割であり，5 人の査読者による査読の必要性についての議論が必要
  - 今年から水工学委員会が Editorial Manager に移行するため，その知見を海岸工学委員会にフィードバックしていただくとありがたい。
  - アブストラクトと本論文ならびに通常号，特集号の位置づけについて議論すべき。
  - 概ね今年度で方針を決めていく。
  - 今後，アンケート形式等を含め議論していきたい。

■ 第 69 回海岸工学講演会の準備状況について（嶋原委員）

- ・日程：2022 年 11 月 8 日（火）～11 月 11 日（金）
- ・会場：横須賀市 ヴェルクよこすか（横須賀市勤労福祉会館）
  - 1 日目：オンライン，2～4 日目：ハイブリッド
- ・実行委員会：栗山（海上・港湾・航空技術研究所，委員長），鈴木・比嘉（横浜国大），八木・嶋原・山本（防衛大），田島・下園（東大），福谷（関東学院大），有川（中央大），高川（港空研），今井（JAMSTEC）
- ・会場について

- 会期中の小委員会は、極力オンラインでの開催を推奨する。
- 少人数（10～20人程度）の委員会は現地開催可能である。
- 施設の利用時間が9時～21時のため、第1セッションの開始が9時40分となる。
- 場費（施設使用料含む）：412,650円
- ・オンライン・ハイブリッドの基本方針および方法案について、説明がなされた。
  - 広報・出版・web開催小委員会と実行委員会で役割分担
- ・機材関連の見積もり額は120万円である。
- ・総発表数228の場合の開催日程シミュレーションが示された。
  - 意向調査において、第1日目オンラインのみでの発表希望者は36名（枠は28名）
    - 一部の方は2日目以降に発表してもらう。
- ・現時点での見積もりは約240万である。
- ・見学会の内容案と工程案が説明された。
- ・懇親会の実施可能性については現在検討中である。
  - 意向調査において、懇親会参加希望者25名（立食であれば35名）、見学会参加希望者69名
- ・ハイブリッド形式での開催方法について、議論があった。
  - 会場PCにプロジェクタが接続される。
  - 司会および発表者がオンサイト参加かオンライン参加は、直前でわかるのか？
    - 意向調査で伺っているが、直前でもう一度確認するのがよい。
    - 司会は会場にいないと運営しづらいのでは
  - 発表者がZoomにつなげる必要がないようにする方がよいのでは。
    - 会場視察をふまえ実行委員会で検討する。
- ・海岸工学企画セッションについての説明がなされた。
  - 「海岸工学の魅力語る・若手からの意見と現場からのアドバイス」をオンラインにて開催。
  - 民間会社5者からいただいたテーマに沿って海岸工学の魅力を学生から語ってもらう。
  - 学生の主張・意見に対して、企業の方からコメント・アドバイスして頂く。
  - テーマごとに賞を設け、表彰する。
  - 土木学会誌の記事に残すとよい（→土木学会に確認）。

#### ■ 第70回海岸工学講演会の準備状況について（原田委員）

- ・実行委員会：後藤（京大、委員長）、森・志村・宮下（京大防災研）、原田・五十里・清水（京大）、荒木・佐々木（阪大）、遠藤・中條（大阪公立大）
- ・日程：2023年11月14日（火）～11月17日（金）
- ・会場：京都市 京都テルサ
- ・APAC2023と同時開催である。
- ・APAC2023はソーシャルイベントなし、海講も同様にソーシャルイベントなしの方針を進める。
- ・会場費についての説明がなされた。
  - APAC2023会場費込みで560万を見込んでいます。
  - wifi環境等については現段階で計上していない。
- ・実行委員会の今後の予定について説明がなされた。
- ・APAC2023の進捗状況についての暫定スケジュールや役割分担の説明がなされた。
- ・APAC2023のLOCメンバーについて説明がなされた。
- ・APAC2023 proceedingsはSpringerLinkにて出版予定である。
  - Closed accessとなる。
  - 最小論文数の制約等はないが、論文数を維持するための意見を伺いたい。
    - 2次利用という考え方で、海講の内容を英語で発表することは可能では（土木学会に確認）。

- 留学生が英語論文を投稿する際、海講と APAC のどちらに投稿するのがよいか？  
→ジャーナルに出さないならインデックスがつく APAC がよいかも
  - APAC2023 の登録料について議論がなされた。
    - どちらに投稿するかは登録料との兼ね合いもあるのでは  
→日々予算を詰めていく。海講の著者負担金を踏まえつつ慎重に決めていく。
  - 開催形式として、今後ハイブリッド形式を継続していくのかについての議論がなされた。
    - メリット、デメリットを踏まえた議論が必要
- 第 57 回水工学に関する夏期研修会 (B コース) 開催について (下園委員, 代理: 北野幹事長)
- 日程: 2022 年 9 月 5 日 (月) ~ 9 月 6 日 (火)
  - 会場: 東京大学 本郷キャンパス
  - B コース: 波と流れと地盤の複合現象 (仮)
    - 初日に共通の話題提供として水工学, 海岸工学からの講演がある。
    - 対面開催, 後日動画配信のオンデマンド形式を導入する。
    - 講義集を電子化し, PDF をダウンロードできるようにする。
- 第 58 回水工学に関する夏期研修会 (B コース) 開催について (渡部委員)
- 日程: 2023 年 8 月下旬から 9 月上旬の 2 日間
  - 会場: 北海道大学
  - A コースは, 国際化, 国際性に関するテーマを考えている。  
B コースについては, もう少し時間をかけて検討する。
  - 原則対面開催を考えている。
  - オンデマンド形式を続けるかは, 今年の様子をみながら検討する。
- Coastal Engineering Journal について (内山小委員長)
- メンバーの入れ替えを行った。
    - 新任: 伴野 (港空研), 志村 (京大), Adriano / 退任: 日比野 (廣大)
  - IF が 3.216 に上がった。投稿数が増えている。
  - Editorial Board を拡充した。
    - 新任: Xiaojing Niu (精華大), Narong Touch (東京農大) / 退任: 日比野 (廣大)
  - 昨年 11 月からの CEJ の出版状況について説明がなされた。
  - 2022 Special issue の紹介がなされた。
    - Coastal Hazards and Risks due to Tropical Cyclones
    - ゲストエディター: 田島 (東大), Kennedy (ノートルダム大), 12 編の論文で構成
  - 2023 Special issue の紹介がなされた。
    - Coastal Disasters in Asia: Forecasting, Uncovering, Recovering, and Mitigation
    - ゲストエディター: 高木 (東工大), Heidarzadeh (ブルネイ大)
    - 6/13 までの投稿数は 14 編 (うち採択済み 1 編, Revise 中 3 編, 第 1 段査読中 9 編)
  - 国別投稿数の推移について説明がなされた。
    - 数年前の 1.5 倍の投稿数になっている。
    - アジアのみならず, 欧米や南米からの投稿が増えている
    - 2021 年投稿の 71 編のうち, 日本からの投稿は 15 編である。積極的な投稿をお願いしたい。
  - CEJ の印税についての説明がなされた。
    - Taylor & Francis にかえてから印税が入ってくる。
    - 5 月に入金, 9000 ポンド (150 万円)

- 有効活用すべく、Special issue で招待論文を企画
  - 今のところ投稿ない。
  - 委員会で有効利用を考えていただきたい。
- 審議事項 4 編についての審議が行われ、承認された。
  - CEJ Award 2021
    - 2021 年に出版された全 36 編の論文のうち、各担当エディターによる受賞候補論文の推薦に加えアソシエイトエディターを含む全エディターによる推薦
    - 最終選考候補論文 3 編に対して全エディターによる全文査読を実施
    - 港空研 田村氏らの論文 (Coastal destruction and unusual wave spectra induced by typhoon Faxai in 2019)
  - CEJ Citation Award
    - 過去 5 年の引用数で選定 (これまでに Citation Award を受賞した論文は除外)
    - Larsen 氏らの論文 (Performance of interFoam on the simulation of progressive waves)
  - JAMSTEC 中西賞
    - CEJ Award の受賞者 (日本人) を推薦 (日本人の定義: 日本で活動している外国人も対象)
  - CEJ Reviewer award
    - 去年から新設
    - 3~5 編査読完了, 締め切りを守る査読者が機械的に選ばれる。平均遅延 0 日の 10 名を表彰。
- 2024 Special issue に向けて動き始めた
  - 例年今頃から始動, 今年の秋から冬に投稿受付 (アブストラクト, タイトル), 2023 年 1 月~2 月頃に全文査読開始。ゲストエディターは港空研の田村 仁氏
  - 広い意味で波浪の研究を集めたい。Call for papers を作成中
- 沿岸域研究連携推進小委員会 (遠藤委員, 代理: 北野幹事長)
  - 3 月に合同シンポジウムが開催された。委員メンバーを調整中
- 広報・出版・WEB 開催小委員会 (荒木小委員長)
  - 昨年度中に若手の先生方に加わっていただいた。
  - Web 情報の充実を図っている。
    - 本の紹介等を定期的にアップデート
  - 海講初日の主担当, 2 日以降オンライン部分を担当
  - ハイブリッド開催での企業展示の意向調査を実施した。
    - 回答 3 社のうち, 申し込むと回答したのは 1 社のみ
  - 論文集 USB メモリについてはエコーが担当する。
    - 記載されている論文集名称を”海岸工学講演会 2022”に変更する。
  - 講演プログラム上の広告, 論文集 DVD 内の業界案内を募集する。
    - 土木学会 web へ掲載する場合, 広告を控えてほしい
  - Youtube Live 配信をどうするかについて議論がなされた。
    - 負担軽減を図りたく, とりやめたい。
      - 配信をやめて, オンライン参加は Zoom で入ってもらう。
      - 翌日以降の Zoom 録画配信で考えている。
    - Zoom 録画を翌日以降配信する場合の諸費用について
      - できればクラウド記録して配信したい
      - クラウド上に記録するとダウンロード不可の設定が容易なため

- 1会場4日間で約7GB必要, 追加のクラウドストレージが必要
- 1ライセンスあたり (=1会場あたり) Zoom プロで7,400円
- オプションで1会場のみ最大参加者数を500名に増やす (+6,700円).
- 残り3会場は参加者数100名
- 4会場分36300円+予備1ライセンスで約45,000円

- YoutubeのLive配信は行わず, Zoom録画配信することについて承認された.
- ・2日目以降のオンライン運営予備PC(共同ホスト)を外部に設けることを考えている.
- 共同ホストが見つかりにくい. 昨年以上に有志をつのりたい.

#### ■ 研究小委員会, 研究会, WGの活動について

- 沿岸まちづくりにおける経済学的手法研究小委員会(安田小委員長)
  - 昨年度から4回委員会を開催している.
  - 将来の気候変動の不確定性を考慮した河川治水の考え方を海岸保全に適用することを中心に取り組んでいく.

#### ■ 「沿岸災害デジタルツイン研究小委員会」の設立について審議(越村小委員長)

- ・設立趣旨, 小委員会構成の説明がなされた.
  - デジタルツインコンピューティングの考え方を海岸工学に導入することで新たな研究課題を探索するとともに, 周辺の学術分野とも連携しながら, 新たな海岸工学の地平を開くことを目的としている.
  - 6つのWGで構成されている. 越村, 森の小委員長2名体制で考えている.
  - 副小委員長, 幹事については今後人選
  - WGグループメンバー, WGグループ長についても広くメンバーを募りたい.
    - 全ての災害を網羅するのは難しいので, 主に津波, 波浪や高潮に起因する事象が対象となりそうだが, あまり限定することなく, メンバー次第で進めていきたい.
  - 対面での研究会実施, 海講前日シンポジウム等での活動報告など研究成果を広く公表する.
  - 設立について審議され, 承認された.

#### ■ 水工学委員会 水理公式集例題集編集小委員会(山城委員)

- ・昨年度に例題案と著者が確定
- ・4/7に泉委員長(北大)から依頼メールあり(9月末をめどに初稿)
- ・来年度出版を目指して進めている. プログラムの公開の仕方については議論をしている段階

#### ■ 土木学会論文集編集会議(4/22)での報告(川崎委員, 代理:北野幹事長)

- ・投稿・査読システムの見直しが進められている.
  - ScopusとESCIへの登録を目指す.
- ・土木学会論文集の構成として和文論文集が2023年より大幅に変更される.
  - No.1からNo.12までが通常号, No.13以降が特集号.
  - 特集号(海岸工学)はNo.17
- ・特集号は和文論文のみが掲載され, 英文論文はJournal of JSCEに掲載される.
- ・ScopusとESCIに準じた以下の変更が, 来年度より必要となる.
  - 参考文献, アルファベットで併記
    - 幹事会において, 本文6ページ+参考文献ということで議論を進めている.
- ・通常号では, すでにEditorial Managerが査読システムとして稼働中である.
- ・特集号は, 通常号の運用が落ち着いた段階で導入予定(2022年度中)

- 各論文毎にチャージ
- これまで、通しページをヘッターに入れていたが、「論文番号」に変更となる。
- 論文番号の付け方において、投稿受付した年の数字が反映される。
- 二次出版についての説明がなされた。
  - 要旨に二次出版であることを明示する。
  - 参考文献に一次出版物を掲載する。
- 特集号の編集・掲載プロセスのルールについての説明がなされた。
  - 特集号の編集状況としては3パターンある。  
編集方法(1)：行事後に投稿・審査を行い、「特集号」として J-stage に掲載  
編集方法(2)：行事開催時には講演集や資料集等別名称で発行し、その後「特集号」として J-stage に掲載  
編集方法(3)：行事開催時に「特集号」（海岸工学はこのパターン）。
  - 行事講演集の名称は”土木学会論文集”としてはいけないことになっている。  
→DVD の名称を”海岸工学講演会 2022”に変更した。
  - 行事講演集掲載原稿は、土木学会論文集編集委員会の定義する「論文」ではないとされている。
  - 土木学会論文集編集委員会の定義する「論文」としては、講演会后、半年程度期間をあけた後に掲載される論文が該当することになる。
  - 行事講演集掲載原稿と J-stage 論文は全く同じ内容あってはいけないとなっている。  
→もし全く同じ内容であるなら、行事講演集は、参加者以外が利用できる発行媒体は認めないとされている。引用も不可。
- 6月中に、編集・掲載プロセス修正のための、意見・課題等の意見をまとめたい。後ほどアンケートも実施する。
  - DVD や USB メモリをやめて、査読終了時に preprint を見られるようにしてはどうか。講演会時に見られるようにすることが重要では。  
→参加者のみが利用できる媒体であれば問題がないのでは。  
→論文引用情報としては、はやく知りたい  
→著者と参加者にメリットがある形式として、preprint がよいかも
  - 論文が半年だせないとは、どのようなことか。  
→講演会の概念がちがう。講演会を切り離す手もある。
  - 特集号で多数の論文を出しているのは水工学、海岸工学、海洋開発  
→その3つが連携して B 部門としての意見を言えば、聞いてくれるのでは。  
→もう少しやりとりした方がよい
  - 半年間も論文引用できないのは、学会員・社会のためにも役に立たない。
  - 英文論文が、Journal of JSCE に吸収されるのはしょうがないが、海岸工学へリンクする等、つながりを明示してもらいたい。
  - 特集号いらんではないか。という議論はないか？  
→アブストラクトのみで講演で、論文は通常号に出すといったやり方があるのでは。  
→我々がどうしたいか、議論をした方がよい。  
→このまま通常号にもっていくと、査読システムがパンクするのは。  
→A 判定や B 判定の論文は、通常号にもっていくのが合理的と考える。残りを行事講演集として掲載する方法もあるのでは。
  - 通常号はページ数が多い。ページ数が少ない方が投稿しやすいといったことはないか。  
→ある程度のページで投稿できるのは、実務上、工学上よいのでは。  
→ページ数は査読の負担と関連する。  
→そのあたりを踏まえて議論か

- ある程度ページ数制限があった方がよいのでは
- このような議論を1年以内にしていけばよい
  - 産官学が情報共有して社会実装するには講演会と論文集の位置づけが重要では
  - 海岸工学は独自の道をいくことを主張してもいいのでは
  - 現状のやり方が継続できれば問題ないということか
  - 現状のやり方が継続できても、引用が半年遅れるということになる.
  - 水工学と海洋開発と意見交換してはどうか

■ ASCE CERC からの報告（森副委員長）

- ・佐藤先生に引き続き委員を務めている.
- ・メンバーが大分変わった. 今後, 6年タームでメンバーが入れ替わる
- ・ICCE2022の運営について報告がなされた.
  - vICCE2020 930編, ICCE2022 オンサイト 790編
- ・ICCE 査読はCERCを中心として実施している.
- ・国別投稿数は, オーストラリア, アメリカ, 日本, オランダの順
  - 日本と中国, スペイン, 韓国は投稿数が3割以上減
  - イタリアからの投稿数が伸びている.
  - 投稿時にコロナがシビアだった東アジアの投稿数が減っている.

■ 2021年予算と支出の報告（北野幹事長）

- ・予算と支出に関するスライドが示された.

次回委員会：11/9（水）に開催予定

以上